

一二月二〇日 ゆき（雪だるまのイラスト）

五日からちょっとづつではあるが雪が降ったおかげで無事先輩から対談のメールが入っていた。まあ、知っていたけど。集合場所は A 地区の駅で、唯一の電車（と先輩が呼んでいたもの）に乗ってどこかまで行った。初めて海を見たけどとても綺麗だった。先輩は晴れてればもつといいと言っていたが灰色の海は液体の塩みたく面白かった。雪が降っているところは初めて見たので記念に今日は天気も書いておく。めんどくさくていつもは書かないけどね。古い遺跡の中を電車が通っていくとき先輩が何か言っていた。トンネルを抜けると……という感じの……。休日だったせいで学習データを抜いて来たのであまり細かいことは覚えられない。突然の対談で外泊許可をとっているわけないので日帰りだったが帰りに窓越しに見た夕日がとても綺麗だった。写真も紙の裏に貼っておく。来年も一緒に行きたいな。

一二月二四日 大雨と雪

今日も雨だった。最近ずっと雨な気がする。雨が止まないのが当たり前だが先輩は登校を禁止されている。多分今までの分の謹慎もあると思う。たまに雪も少し降るけれど。どうやら先輩の担当の先生？（先輩はトライヤー？とか言っていた気がする審判者？とかの役職が近いらしい）が連日一人ぼっちの僕を心配して登校許可を出したらしい。前のように素直に喜べない。「純生物は純生物以外の改変を禁ずる」みたいな法律とかあった気がするんだけど。

本人は自分の未来を知っているのにもあんなおちゃらけているんだろうか。僕はまだ感情とかその辺りが純生物に劣るのでよくわからないがどうなんだろう。僕と先輩じゃ価値観も違うだろうし感じ方も違うのかも。

同じ人間なのに純生物は創生物に比べて寿命が短いと聞いたことがある。いろいろ延びて一〇〇年くらいだけ？そういえば先輩は今何歳なんだろう。あのときもって趣味とか誕生日とかの欄を重点的に見ておくべきだったと後悔してい

る。そつちを最初は調べるつもりだったけど。二年も一緒にいて誕生日を祝った記憶がない。

対談のときに作ってくれたパンケーキは甘かった。

一二月三一日

Z 地区に先輩が連れて行って行ってくれた。規制が厳しいと学校で習った気がするがなぜ入れたんだろう。先輩のことなのでまた無断で入ったのかもしれない。でも先輩とお出かけは楽しいので嫌ではない。今回はちゃんと考えられるように準備をして来た。正直このまま校則を破り続けて卒業できなくなって僕の卒業まで一緒に居られたら、とか考えてしまう時もある。

うむ……。

今回もまた電車に乗って行った。

Z 地区方面の電車というだけあって、車内は僕と先輩だった。車内ではいろいろな話をしてくれた。

——私もう人生の七分の一以上を生きたが一〇〇分の一しか生きていない君にとって、今の世界はどう見えている？

——昔の純生物はたったの五〇年しか生きられなかったらしい。人間も進化したね。

——創生物である君はまだまだ未熟だが、純生物よりもはるかに成長速度も処理能力も、何もかも早い。五〇〇年くらい寿命があるのだから好き勝手に生きるのだよ。

今日は割と人生観とかの話をした。最近先輩はよく命とかについて話をしている。

「私と君の寿命は違うが、私には奥の手があるのでね。君が成長したとき、私と共に研究をしないか？」

電車を降りた吹雪の中でそんなことを言っていた気がする。先輩が大人に混ざって何らかの研究をしているのはなんとなく知っていたが、僕なんかはそのお手伝いができるんだろうか。研究してもって理科特化の生徒がやるものだと思う

たけど。いいのかな。

一月二日

あけおめ！と黒い文字でデカデカと書かれた葉書がポストに入っていた。先輩からだ。たしかZ地区で昔伝統だった新年のあいさつとかだ。歴史も勉強はしているが流石に大昔すぎてちゃんと勉強していない。

重点的にやっているのはここ二〇〇年分くらいだし、人類の誕生とか疫病の流行とか戦争とかそういうのばかりで文化方面はあまりやっていない。今度先生にその辺りのことを教えてもらおう。先輩も二〇〇年前とかその辺りの歴史の真似をよくしている気がするし。お気に入りなのかな？

葉書には「一月三日、家に行く。鍋を用意しておけ」と書かれていた。果たし状みたいだ……。鍋は備品で用意してあったのでとりあえず洗っておいた。

最近日記に対談のこと書いてたくない？僕。

でも楽しいことは思い出したいし、このまま他のことも書くことにしようかな。

一月三日 晴 マイナス四度

去年できなかった鍋パーティーをした。論文とかが忙しいと言いついていた先輩も大きなお休みがもらえたらいい。大分気持ちの整理がついて、久々に笑えた気がする。今回改めてやはり先輩の話は面白いと思った。もう直ぐ聞けなくなるのが残念だ。卒業するんだし……。しかし去年僕が大人になったらまた会えると言っていた記憶がある。嘘なんだろうけど。奥の手、とかも言っていた気がする……。ああ、日記を書くときはどうしてもこういうことを考えてしまう。うむ。

鍋のことを書こう。

——私は最近白菜を育てているんだ。あれはZ地区の出身ならみんな口に合うんじゃないか？

とか……。碌に会話を思い出せない。今日はここまでにする。

一月四日 すごい雪（雪だるまのイラスト）

大雪警報が昨日から出ている。そのせいで鍋の何かはできなかった。大雪のせいでメッセージが届かない。ここまで雪が降るなんてことある？

2メートルくらい積もったせいで家から出られない。先輩が驚いたこととか全部書いておけると言っていたので今日の日記を書いていくけど……。この日記。

そういえば一〇月くらいに貸してもらって返しそびれていた本があったので今日はそれを読んだ。

今日はおわり！

一月五日 まだ雪

ずーっと降ってる。なんとか通信は復旧したようで先輩から電話がかかってきた。「警報は解かれた！遊びに行こうじゃないか！」とのこと。学校横の商店街前、地区一番の広さを持つ公園で対談？をした。

どっちかと言うと雑談。

今回は人の優しさについてだった。まだまだ幼い君へ贈る感情のお勉強だよ、そう言っていた。幼いは余計じゃないかな。一応脳みそ的には先輩と同じ年齢のハズなんだけど……。

初雪の時の真っ白クマさんスタイルとは打って変わって狐っぽいフェイクフアーの首巻と動物の手を模した手袋をしていた。白いモコモコのコートは一緒だった。お気に入りらしい。

出会って開口一番「きつねだよ」と気の抜けた声。なんだか今日の先輩は子供っぽくて、実際対談が終わったら雪合戦をしていた子供たちに混ざっていたし。

一月二〇日 あめ

先輩が学校に犬と言いつ張っている例の動物を連れてきていた。数ヶ月ぶりに見

たがやはり犬には見えない。そう言えば「凶鑑を見ながら数年かけて頑張って復元したのだが!？」と先輩は拗ねてしまった。復元用に使っていたと言う手描きの資料を見せてもらったが、どうやら先輩はあまり絵心が無いようだ。

対談では二つの視点から犬を見てみよう、という事で犬に関する本(有名なやつで、なかなかタイトルのインパクトがすごいのか)や手紙、写真などを見ながらあれこれ語ってくれた。

犬が好きなんだろうか。ただ、再び先輩が飼っている犬(とはとても言えない見た目だが)を見れたのは面白かった。鼻がとてもしつとりしてた。

一月二一日 晴 マイナス一五度

宇宙に関する本をたくさん読んだ。なんというか強烈な内容だった。今よりさらに未来の話だし創作とわかっていても結構受け入れ難い。今日の先輩はどこか楽しそうで笑顔で宇宙と並行世界について話していた。得意気というか研究者モードというか。きつと研究がうまく行っているんだろう。僕も計画が上手く進んでいるおかげか今日はお互い話が弾んだ。今日の会話は意外にもちゃんと覚えているので書きちゃおうかな。

———そういえば純生物の寿命は知ってるかい？

一二〇年程度だと聞いているのでそう答えた。

———確かにね、素の肉体の限界がその辺りだったようだ。延命は人類の夢だが意外と世論は道徳が勝ったようだし、一〇代の老衰事件もあってあんまり延命するやつはいないんだ。

———本当は教えちゃアいけないんだけど、肉体を捨てたり凍らせておけば意外と数百年生きていけるんだ。コールドスリープ(太古のカナ発音だった)の技術は思ったより発達しててね———ああそうだアンチエイジングに関する事故については授業で習ったろだから省略するよ。ともかくやろうと思えば君たち創生物より長生きなんだよ？

と、自信満々な顔で教えてくれた。

———それに長命は自決防止になる、らしいじゃないか。長く生きれば生きるほど希死念慮は薄まるらしいよ？私は知らないけれど。去年までいた三年歴史特化の教授は極秘手術を受け続けて二〇〇〇歳くらいだったらしい。が、今年になって急に精神が耐えきれなくなって亡くなった、と聞けば本当に長命が素晴らしいかはわからないが。

今日対談の先輩は、普段の冗談ばかり言う変人の面とは違う、何かを見透かしている上で相手にヒントを与えたり問題を引っ掻き回すような初めて見る面だったように感じた。この人に対して初めて恐怖を感じた。

二月一四日 晴れ

研究所のカカオを複製してきたと言う。元のような効力はないが味は甘くしておいた、そうだ。チョコレートは本当に昔からあるそうだが自分が今日飲んだ味とは程遠いんだろうなと思うと少し寂しさもある。今の僕たちの味覚に合わせているらしいが、不思議な舌触りと口にだけ広がる甘いミミドナツツのような風味が美味しかった。いろいろな地区では昔チョコレートやお菓子を送り合う文化があったらしい。なんだかんだラツピングでくれたものはマカロンだった。なんだろう？それとトライアーさん？に研究所に招待されたとかでしばらく休学するそうだ。来年また会える、と言っていたから二ヶ月はこっちに来ないのかな。さみしい。

二月一七日 晴 マイナス一〇度

研究が正式に認められたこともあり、先輩は早期卒業するらしい。なので今日は最後の対談をした。今までの振り返りとか。

———ずっと知ってたがっていたようだから、今回はお互いの自己紹介をしよう。今日持ってきていたデータポットに対談の全ての音声が残っている。紙媒体だと音声がかくつけられないのが残念だ。

三月一日 晴れ 桜吹雪

進級テストがあった。以前先輩にもらった本から引用した問題がたくさん出たので簡単だった。ニーナちゃんは全然ダメだったよ、と笑っていた。クラスが分かれたら今度こそ一人ぼっちになってしまうのでニーナちゃんも点がとれるといいな。

三月二〇日 晴 二〇度

封筒に入ったテストが返ってきた。規定値より二〇〇だか三〇〇だか上だったようで飛び級になるらしい。卒業式の日も書いてあった。一覧を見てみるとニーナちゃんはいなかった。今年度は最初からいたりいなかったりで学級の移動もあったみたいだからやっぱり他の純

生物の人と同じように F 地区で暮らすことになったのかな。

今日で多分この日記も終わりかな？卒業した理科特化の知り合いはたまに読み返してると言っていたし僕も保管しておく。

卒業後は時空研究者が多いところに行くことにした。

計画の実行は二〇〇年後かな。成人式もあるし。

彼のメモ用紙はこれだけだった。

彼が一度まとめたようだが順番が明らかにバラバラだった。後で並べ替えよう。当時焦っていたのもあったのだろう。焦りというよりもっと極限状態だったのだろうが。

「日記にある二月一七日に録音した、という音声を再生しますね」
私の隣にいた助手、レイヤ——本当は SD・108 という名だが——が、傷んだデ

ータポットからコードを繋ぎ、デスク横のスピーカーに繋いだ。

自分の長い白髪を後ろでまとめ、ヘッドホンをつける。

ノイズが混じっていて、プツプツと音が途切れるような音がたまに入る。二〇年後にはもう聞くことはできないだろう。

——自己紹介ですか？

——ああ、君はよっぽど私のことが気になっているようだからね。まずは私からしようか。ええと、私はレイだ。君より2つ上だが純生物は四年制なのでね、つまり今年が最後というわけだが。

——それは……知っています。

——友達の自己紹介カードを書くときだって名前とか知ってることも書くだろう？それと同じさ。

——まあ、わかりました。では僕も。僕の名前は SD・052、とされています。52 だと呼びにくいらしく、みんなはニーゴとかニコとかが呼びやすいみたいですね。あと、特級クラスの二年です。今のところ。

——うん、いいね。次は……何にしようか。そうだ、好きなものにしよう。私は辛いものが好きだ。昔 Z 地区の一部で流行ってたらしい郷土料理とか。あとは綺麗なものを。キラキラしたものとか。

——純生物の間では甘いヒーリングティー（昔のカナ発音）が人気だって聞きましたよ。意外です。僕は、そうですね……。以前先輩から頂いたチョコレートがいちばん好きですね。初めて食べる味でした。あとは暗い場所とかアンティーク品が好きです。

——じゃあ苦手なものだ。私は蛇が苦手だ。君イ……驚いた顔をしているな。昔叔父が実験用に改造された白蛇に噛まれて死んでから嫌いなのだよ……どうしてもね。ほらほら、君も言うんだ。

——ああ！はい。僕は……えっと……やっぱり暗記とか？ですかね。特級は他の人より覚えることが多いので暗記もやっぱり必要だし……。慣れてるけど疲れるのであんまり得意じゃないですね。

——ふむ……そうきたか。まあいい！次は……お楽しみ質問コーナーだ。ニコくんよ、私への質問は何かあるかな？

——そう、ですね……。先輩はどうして髪を伸ばしているんですか？夏よりさらにのびましたよね。

——これか？ただのファッションさ。長い方が色々できるからね。

——なるほど……。じゃあ次です。右目だけ青いのはどうしてなんです？左目は黒曜石みたいに黒いの。

——そうだな……。実験に必要なになったから使った、とだけ。青にしているのはこれもファッション性を重視した結果だと思ってくれ。

——結構ファッションとか気を使ってるんですね。いつも制服に白衣なので無頓着だとばかり。

——頭部はこだわりたいたいのさ。たしかに胴体はあんまり気にしてないな。

——……あと三つ、いいですかね？

——ああ。

——犬、好きなんですか？

——好きだね。曾祖母が本物の犬を飼っていたからよく触っていたよ。本物はもつとふかふかであったかいいんだよね。

——そう……なんですね。

——まあ、もつとちゃんとしたのをまた作ろうとは思っているんだけどね。

——あの……先輩はなんの研究をしているんですか？

——知りたいかい？

——はい。

——ほんとに？もう知ってるんじゃない？

——いえ、僕は何も……。

——まあいい。私はねエ……不老不死について研究しているんだ。

——不老不死？

——あまり現実的ではない単語だから普段はあまり使わないのだけど……。簡単にいえば、そうだ。

——不老不死なんてそれこそ小説や神話での話だ。何度も実現する、実現する、と言われ続けていまだに実現していない。

——……体を乗り捨てればいい、って前言ってませんでしたっけ。

——体を乗り捨てたやつとなんて会話できないよ。発声方法が違うんだから。磁力を活用しようとしたけど意識体は水晶体に映らないんだ。音の出所も結局わからなくて……。

——……。

——研究についてはこれくらいにしておこう。さあ、最後の質問を。

——あつ、ああ……。その、どうしてこの同好会を立ち上げたんですか？

——「非公式文学同好会」……。一応、特級クラスの生徒は“部活動”に入ることが推奨されてるんですが……。バッチをつけていたのにどうして声をかけたんですか？

——そうだね、それがあった。簡単に言えば……一目見たとき君に興味を湧いたから、だ。君には入学してしばらくニーナ以外の知り合いがいなかったようだ

し、SD・052型は叔父の考えた創生物だね。あと、入学式の後、教室で本を読んでいたよね。私がよく読んでいたものばかりだったよ。髪の毛も月のように白くてふわふわで、曾祖母が飼っていた犬に似ているし。なんと言えばいいんだろう。

ああ、あと。トライアーに創生物ともつと交流しろって言われててね。ううむ……

そうだね、君と友達になりたかったんだ。

——友達、ですか？

——ああ。それにSD・052型は一人だけ、つまり君だけだ。叔父のメモを見たことがあるけど記憶力を上げて、より人間的な感情が持てるようにしたものが君らしい。創生物はアンドロイドをより人間に近づけたものだと言われているし、

規則を破ることを嫌がるって聞いてね。本は特に、人間性を育てるのにぴったりだと思っただから、作ったのだよ。

——……答えになってますかね。もうちょっと違う方向性が来ると思っていたんですが。

——いいじゃないか。どうせ君が成人する頃にまた再会するんだ。その時まで

に私も語彙を増やして気持ちを手くまとめられるようにしておくよ。

——！
——君がデータを見たのは知っている。あとは好きにすればいい。

ブツツと鳴って音声途切れた。彼が録音したのはここまでのようだ。

やけに間が長い所もあって音声は三〇分になっていた。その間に別のメモを見つけたのかレイヤ君がパンパンの茶封筒を抱えて立っていた。

「研究所侵入時から、博士が目覚めるまでの日記もありましたが、読まれますか？」

「一年分だけ？」

「期間はそれくらいですがこれもあまり枚数がなくて」

「わかった。読もう」

あの事件について語ろう。

SD・052が研究所からコールドスリーパーを盗み出したのだ。つまり私を。

在学中から私はコールドスリープで二〇〇年近く眠ったのち、創生物化の手術を受けて寿命をのぼし、頭脳を半永久的に使うというトライアーからの提案だった。——二〇〇年というのは創生物の成人が二〇〇歳だからだ。あくまで形としての“成人”だが——創生物化の手術には創生物一人分の肉体がいるらしい。見た目も何もかもが創生物に近づくが、思考や感情は純生物のままではいられない。創生物がそんなことに使われていることより私が変わってしまうことを嫌ったのだろうか。危うい行動を取る気はしていたが、より人間らしい心を持った彼がどんな行動に出るか気になったので止めなかったのだが……。解凍後私が目を覚ますまでずっと匿っていたらしい。目を覚ましてしまうとどんな麻酔を使っても創生物化の手術が難しくなるというのもあってか、ずっと側で見守っていたと聞いている。あまりにも悲惨な状態に、騒いでいた報道は急にやんわりとした表現になったとレイヤが語っていた。

ニコの今後は未定だ。今は心身の治療のために入院している。

二〇〇日目のものを読んでいく時に、2日目のものだけ学園生活の日記に貼られていたのを思い出す。結局彼が言っていた最後の“純生物のトライアー”は数年前に寿命で亡くなってしまった。今は創生物のトライアーがたくさん活躍しているようだ。二〇〇年間眠っていたわけだからいろいろ変わっているだろう。

「博士が眠っていた間のことばかりだと思うので、覚えていないことやわからないことがあればワタクシが答えますよ」

横を見ればレイヤが微笑んでいた。彼は一五〇歳あたりだった気がするのですが、ちょうど私の知らない期間を知っている人だ。ニコは——今二一〇歳くらいだろうか。創生物の寿命は五〇〇歳と言われているが、実際はもっと長いだろうしまだまだ二人とも若いな、などと思いが脱線する。まあ私も一八歳で止まったままみたいなもので、なんだかんだ最年少だ。

研究熱心なレイヤがいる場であり脱線するのも良くないので、とりあえずメモを見てみる……。素振りを見ながらレイヤの方を見る。

『純生物の天才研究者失踪！』

大見出しにそう書かれた新聞の一面が見えた。当時の記事だ。

死ぬのがあまりにも怖かった当時、コールドスリープの研究をしていた。一番発達していた不老不死への技術がそれだったのだ。解凍技術も発達し、成功例も何件か出ていたので最終段階で自分を冷凍した。若気の至りと表現すると別に失敗したわけではないので違う気がするが、なかなか無茶をしたように思う。

それに、特別仲の良かった後輩にも迷惑がかかってしまった。

「SD型が人を襲うのなんて初めての事件でしたから、純生物の素人記者たちに脚色されて、さらに話題になったんですよ」

「そうなのか？」

「ワタクシ転職を考えてた時期なんでいろいろインターネットとかも見てたんですよ」

レイヤの前職は肉屋だったと聞いている。なぜ今の研究職についたんだろう。

「……一度休憩しましょう。もうSD型も型落ちの時代です。かのSD・052も直に無事帰ってきますよ」

「……そうだね、いつものを頼むよ」

「ホットチョコレートですか？ミミドナツツに味が近いからワタクシ苦手なんですよね」

「まあ、いいじゃないか。2杯入れておいてくれ」

「わかりました。ワタクシはグリアをいただきますよ」

机の上の“捜査資料”を一度まとめ直すと、レイヤはキッチンルームへと消えた。

その日は満月だった。レイヤいわく月が出るのは数年ぶりだという。大きな天窓からは星々や月がとともよく見えた。

この夜、彼は研究所にやってきた。

「お久しぶりです、先輩」

「ああ、久しぶり。チョコレートなら用意してあるよ」